

一般演題口演 | 一般演題：教育(研修医,看護師,コメディカル)

■ 2024年7月19日(金) 15:25 ~ 16:10 ■ 第11会場 (宝山ホール 3階 第5会議室)

### [O33] 教育(研修医,看護師,コメディカル)③

座長:梅村 武寛(琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座)、新田 雅彦(大阪医科薬科大学 医療安全推進室)

15:25 ~ 15:32

[O33-01]

ALSトレーニングが、BLSの知識の一部を誤認させる可能性

\*永渕 克弥<sup>1</sup>、箭代 理沙<sup>2</sup>、小田原 一哉<sup>3</sup> (1. 松山市民病院 臨床教育室、2. 松山市民病院 看護部、3. 松山市民病院 救急科)

15:32 ~ 15:39

[O33-02]

救急救命士学生による救急車を活用した実践的活動実習の教育効果の検討  
～学年別と学年合同の異なる実習形式の視点から～

\*三橋 正典<sup>1,3</sup>、小倉 勝弘<sup>1</sup>、中澤 真弓<sup>1,4</sup>、宇田川 美南<sup>1</sup>、齋藤 達<sup>1,2</sup>、星 光長<sup>1</sup>、原田 諭<sup>1,3</sup>、藤本 賢司<sup>1</sup>、成川 憲司<sup>1,3</sup>、鈴木 健介<sup>1,4</sup>、小川 理郎<sup>1,4</sup> (1. 日本体育大学 保健医療学部 救急医療学科、2. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科 救急災害医療学コース、3. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科 救急災害医療学、4. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科)

15:39 ~ 15:46

[O33-03]

手術室を活用した救急救命士のスキル向上と多様な業務への応用について

\*藤原 悠太<sup>1</sup>、相川 なほ子<sup>1</sup>、勝 博史<sup>2</sup>、芝 祐信<sup>2</sup> (1. フィルタス株式会社、2. 地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立荏原病院)

15:46 ~ 15:53

[O33-04]

シアトルのParamedicからの実践的教育が当学生におよぼす影響

\*小川 理郎<sup>1</sup>、成川 憲司<sup>1</sup>、藤本 賢司<sup>2</sup>、三橋 正典<sup>2</sup>、小倉 勝弘<sup>2</sup>、原田 諭<sup>1</sup>、星 光長<sup>2</sup>、宇田川 美南<sup>2</sup>、中澤 真弓<sup>1</sup>、鈴木 健介<sup>1</sup> (1. 日本体育大学大学院/日本体育大学救急医療学科、2. 日本体育大学救急医療学科)

15:53 ~ 16:00

[O33-05]

救急救命士養成課程の病院実習における実施数と評価の関連性について  
～静脈路確保と薬剤投与に関する項目の検討～

\*宇田川 美南<sup>1</sup>、天野 智仁<sup>1</sup>、三橋 正典<sup>1,2</sup>、原田 諭<sup>1</sup>、小倉 勝弘<sup>1</sup>、星 光長<sup>1</sup>、藤本 賢司<sup>1</sup>、中澤 真弓<sup>1,2</sup>、鈴木 健介<sup>1,2</sup>、小川 理郎<sup>1,2</sup> (1. 日本体育大学保健医療学部 救急医療学科、2. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科 救急災害医療学)

16:00 ~ 16:10

時間調整

一般演題口演 | 一般演題：教育(研修医,看護師,コメディカル)

📅 2024年7月19日(金) 15:25 ~ 16:10 🏢 第11会場 (宝山ホール 3階 第5会議室)

### [O33] 教育(研修医,看護師,コメディカル)③

座長:梅村 武寛(琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座)、新田 雅彦(大阪医科薬科大学 医療安全推進室)

15:25 ~ 15:32

#### [O33-01] ALSトレーニングが、BLSの知識の一部を誤認させる可能性

\*永渕 克弥<sup>1</sup>、箭代 理沙<sup>2</sup>、小田原 一哉<sup>3</sup> (1. 松山市民病院 臨床教育室、2. 松山市民病院 看護部、3. 松山市民病院 救急科)

【はじめに】JRCガイドラインにおいて、BLSではCPR開始後、体動やAED到着またはALSに移行するまでは、定期的な呼吸と脈の確認を行わない。ALSについては2分毎に電気ショックの必要性和ROSCを評価する。今研究では受講者が正しく理解しているか評価した。【方法】BLSコースおよびICLSコースにおいて、コース前後に正誤問題を出題し正解率を評価した。両コースにおいてBLS中のCPRでは、定期間隔での評価を行わないよう指導した。【結果】受講数はBLS 27名、ICLS 27名。コース前のBLS-CPR中の定期間隔評価を問う正解率は66.7%、51.9%であり、有意差は見られなかった。コース後BLSコース正解率 96.3%となったが、ICLSコースでは正解率 29.6%と、正解率はむしろ低下した。正解率には有意差が見られた。【考察】ICLSではALSを繰り返し訓練する。ALSでは2分に1度の評価を常に行っており、BLSの知識を妨げている可能性があった。【結語】ALSを含む研修は、BLSの知識を誤認させる可能性が示唆された。これを考慮した上で、適正な指導が必要であることが考えられた。

一般演題口演 | 一般演題：教育(研修医,看護師,コメディカル)

■ 2024年7月19日(金) 15:25～16:10 ■ 第11会場 (宝山ホール 3階 第5会議室)

### [O33] 教育(研修医,看護師,コメディカル)③

座長:梅村 武寛(琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座)、新田 雅彦(大阪医科薬科大学 医療安全推進室)

15:32～15:39

#### [O33-02] 救急救命士学生による救急車を活用した実践的活動実習の教育効果の検討

～学年別と学年合同の異なる実習形式の視点から～

\*三橋 正典<sup>1,3</sup>、小倉 勝弘<sup>1</sup>、中澤 真弓<sup>1,4</sup>、宇田川 美南<sup>1</sup>、齋藤 達<sup>1,2</sup>、星 光長<sup>1</sup>、原田 諭<sup>1,3</sup>、藤本 賢司<sup>1</sup>、成川 憲司<sup>1,3</sup>、鈴木 健介<sup>1,4</sup>、小川 理郎<sup>1,4</sup> (1. 日本体育大学 保健医療学部 救急医療学科、2. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科 救急災害医療学コース、3. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科 救急災害医療学、4. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科)

【背景と目的】コロナ禍以降、本来履修すべき救急車同乗実習が縮小された。当学科の実習において、通報から病院収容までの救急隊業務を現実現場を再現し、各学年別、また学年枠に囚われない実習形式が、学習に与える影響を教育手法の面から評価した。【対象と方法】学年別実習136名と学年合同での実習119名に、現場で遭遇する内因・外因の6例の重症例を緊急度・重症度判断、特定行為、傷病者とその家族への接遇を理解させた。実習後のアンケートから教育効果を因子分析で確認した。【結果】各実習は第1因子(学習意欲)、第2因子(実践的な観察・処置)、第3因子(現場のイメージ)で構成され、学年合同による実習では、第1因子、第2因子が収束し、弱い正の相関を認めた。【考察と結語】学生は自ら現実の現場環境で学習することが意欲の向上と内容を理解した観察・処置の獲得に繋がり、学年を越えての合同実習では、救急現場の体験を復習し、積極的な意見交換によって、接遇、観察手技、病態把握などの知識と技術を重点的に学習して、教育効果が認められた。

一般演題口演 | 一般演題：教育(研修医,看護師,コメディカル)

📅 2024年7月19日(金) 15:25 ~ 16:10 🏢 第11会場 (宝山ホール 3階 第5会議室)

### [O33] 教育(研修医,看護師,コメディカル)③

座長:梅村 武寛(琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座)、新田 雅彦(大阪医科薬科大学 医療安全推進室)

15:39 ~ 15:46

#### [O33-03] 手術室を活用した救急救命士のスキル向上と多様な業務への応用について

\*藤原 悠太<sup>1</sup>、相川 なほ子<sup>1</sup>、勝 博史<sup>2</sup>、芝 祐信<sup>2</sup> (1. フィルタス株式会社、2. 地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立荏原病院)

【背景】当院は東京都区南部を医療で支える地域医療支援病院で救急外来に救命士有資格者を配置している。救命士は養成課程において感染対策・清潔操作の知識を身に着ける機会がなく、当院の救命士も同様である。法改正に伴い感染対策研修の履修が義務付けられたが、完全に理解・習得するには臨床現場における実務経験が必須である。【目的】当院の救命士に感染対策・清潔操作の技能を身に着けさせると共に、救命士を活用したタスクシフト・シェアの可能性を検証する。【方法】救命士を手術部に配置し、看護師の指導の下、手術準備や器械の展開を日常的に行う中で、マンパワーを補完すると共に、感染防護・清潔操作の知識・技術を身に付ける。【結果】救命士は感染対策・清潔操作の技能向上のみならず、患者コミュニケーションや多職種連携の重要性を再認識した。指導する看護師も支援職への教育方法を見直すきっかけとなった。【考察】このモデルが、救命士にとって幅広い技能向上に寄与し、受け入れる多職種にとっても有効であることが示唆された。【結語】救命士の手術部門配置を通じて感染対策・清潔操作の技能が向上し、チーム医療の向上にも貢献することが示された。

一般演題口演 | 一般演題：教育(研修医,看護師,コメディカル)

📅 2024年7月19日(金) 15:25 ~ 16:10 🏢 第11会場 (宝山ホール 3階 第5会議室)

### [O33] 教育(研修医,看護師,コメディカル)③

座長:梅村 武寛(琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座)、新田 雅彦(大阪医科薬科大学 医療安全推進室)

15:46 ~ 15:53

#### [O33-04] シアトルのParamedicからの実践的教育が当学生におよぼす影響

\*小川 理郎<sup>1</sup>、成川 憲司<sup>1</sup>、藤本 賢司<sup>2</sup>、三橋 正典<sup>2</sup>、小倉 勝弘<sup>2</sup>、原田 諭<sup>1</sup>、星 光長<sup>2</sup>、宇田川 美南<sup>2</sup>、中澤 真弓<sup>1</sup>、鈴木 健介<sup>1</sup> (1. 日本体育大学大学院/日本体育大学救急医療学科、2. 日本体育大学救急医療学科)

当学科は2016年からUW Medicine HARBORVIEW MEDICAL CENTER Paramedic Courseと国際交流を開始した。2023年度から春と秋に2週間Seattle Paramedicを招待し、学生にはシミュレーション実習で現実的な活動について。また、教員には勉強会（EFIS）で実践的なホットな活動内容とEMSでの問題点などの講義を行った。毎年夏と冬に学生が参加する2週間のSeattle研修では、土日の2日間にMEDIC ONEでの救急車同乗実習体験を実施している。2024年の2月末に参加した学生は、心肺停止、呼吸不全、意識障害、ODなどを体験した。出勤の合間に、実際の呼吸管理、循環管理、救急薬品の使用法さらにhigh-performance CPRも受けた。特に学生が強く感銘したのは、傷病者への接遇だけでなく、輸液セットを準備し自らの前腕で、静脈路確保のトレーニングをさせてもらったことである。日本の教育では決してあり得ない実践教育に学生はParamedicへの尊敬だけでなく、人命救助にすべえて必要な要因を学んで著しい動機を得たようである。

一般演題口演 | 一般演題：教育(研修医,看護師,コメディカル)

■ 2024年7月19日(金) 15:25～16:10 ■ 第11会場 (宝山ホール 3階 第5会議室)

### [O33] 教育(研修医,看護師,コメディカル)③

座長:梅村 武寛(琉球大学大学院医学研究科 救急医学講座)、新田 雅彦(大阪医科薬科大学 医療安全推進室)

15:53～16:00

#### [O33-05] 救急救命士養成課程の病院実習における実施数と評価の関連性について ～静脈路確保と薬剤投与に関する項目の検討～

\*宇田川 美南<sup>1</sup>、天野 智仁<sup>1</sup>、三橋 正典<sup>1,2</sup>、原田 諭<sup>1</sup>、小倉 勝弘<sup>1</sup>、星光長<sup>1</sup>、藤本 賢司<sup>1</sup>、中澤 真弓<sup>1,2</sup>、鈴木 健介<sup>1,2</sup>、小川 理郎<sup>1,2</sup> (1. 日本体育大学保健医療学部 救急医療学科、2. 日本体育大学大学院 保健医療学研究科 救急災害医療学)

背景：当学科は二次病院で45時間、三次病院で約300 時間の実習を行う。三次病院では静脈路確保と薬剤投与が実施項目に含まれ、3段階で自己・指導者評価を行っているが実施数と評価の関連性は明確ではない。目的：静脈路確保と薬剤投与の実施数と評価の関連性について検討した。方法：2020～2022年の履修者205名の評価表から、記入漏れと実施0回を除外した100名のデータを用いた。静脈路確保と薬剤投与の実施数の中央値と四分位範囲を抽出し、実施数と自己・指導者評価、自己・指導者評価の関連を検討した。結果：静脈路確保実施数は6(3-10)だった。実施数と自己評価( $r=0.242$ )実施数と指導者評価( $r=0.175$ )自己評価と指導者評価( $r=0.636$ )だった。薬剤投与実施数は2(1-4.75)だった。実施数と自己評価( $r=0.268$ )実施数と指導者評価( $r=0.237$ )自己評価と指導者評価( $r=0.461$ )だった。考察・結論：当学科は実習のために実技試験を実施し、実習先に対して実習説明会と報告会を実施している。その結果、実施と指導者評価を受ける機会が増え、自己・指導者評価が共に高まった可能性がある。